

夜の街は海にたとえられる。俺が知ってるのは北陸のちっぽけな田舎にある夜の街、都会と呼ぶにはどうにも首を傾げてしまう、それでも繁華街と言うならどうにか足りているような夜の街だし、海の方も真っ暗な港町の日本海である。俺は東京も太平洋も知らない、日本も世界も、自分のことも全然知らない。強いて言えば俺の生まれ育った富山というこの土地のことは多少知っている。でも、そもそも知るとはどういうことなのかを明確には知らないから、結局のところ何ひとつ知らないと言った方がいい。

無知な俺は、しかし、生まれつき何かを感じることができた。人は言葉を覚えるよりも先に何かを感じるという才能があることに気づく。赤ん坊は産まれながらにして手のひらに感覚というギフトを握っていて、痛い眠い温かいといった感情や知覚を全身で受け取る。言葉は自分の受け取った感覚を表現し伝えるための道具であり、たとえば夜の街は海にた

とえられるといったことは、俺の感覚を言葉で表現しているに過ぎない。言葉は知らない。と使えないけど、感覚は知らぬ間に持っているもので、すり減っていくイメージに近い。二十一歳の俺の感覚はどれ程のものなのかわからない。それに対して言葉の貯蓄は社会経験と同じに乏しく、だから俺は地元富山の夜の街のことすら、海なんてありきたりな比喩でしか表現できない。でも、俺にとって夜の街はたしかに海だった。そして、人間はその海に浮かぶ孤島である。夜の街はそこに住む人の息遣いというか胸の音みたいなものを胎動させている。それはちょうど月明かりの下では押し寄せる波の音が体の内側から聞こえるように、見えなくなるからこそ見えてくるもの聞こえてくる声があることを夜の闇は教えている。諸島とか列島とかに見える島も結局は孤島だと無言で指摘され、それでも自分はひとりじゃないぞと浮かんでいるように溺れている島。俺もまた広さも大きさも、

いつ沈むかもわからない孤島である。

人間が島であるならば、島もまた人間なのではないか？ 俺たち日本人にとってもっとも身近な島は日本列島に他ならない。南北に細長いその列島は工夫すれば人体のように見えなくもない。首都である東京を心臓とするならば、人間は酸素を運ぶ血液であり、人体を蝕むウイルスでもある。じゃあ頭脳は？ 骨は？ 皮膚は海岸線として、本州から離れた沖縄諸島は、人体のどの部分と説明すればいいのか？ 難しいことはわからない。ここで言いたいのは、俺が夜の街に繰り出すようになったきっかけについての話である。

二十歳の春、俺は三度目の医大受験に失敗し、加えて父が交通事故で急死すると、何の職歴もなく社会に放り出された。言葉とはつくづく便利なもので、俺の悲劇はたった数十文字で語ることができてしまう。その後俺はバイトに夢中で医大受験どころではなくなってきたが、それは生活費に困った故ではない。現

に父の命と引き換えに得たウン千万は、預金として手付かずに残っている。つまり、俺はお金では買えないもの、人とのコミュニケーションや社会と繋がっているという実感を求めてバイトをしていた。要は寂しかったのである。しかしバイトで埋められるのは、週五日のシフト表くらいだった。順当にいけば医大生として勉学に励んでいるはずが、俺は何をしているのかと劣等感ばかりが募った。自分のため息によって膨らんだ風船は、ある時ついに爆ぜた。俺の感覚がこのままではいけないと訴えて、内側から裂いたのかも知れない。そして、俺はその日から人目も憚らずに、白衣を着て夜の街を歩くようになった。あまりにも突飛なこの奇行は、先ほどの列島人体論によって説明される。

日本列島という肉体は七割以上が山地で構成され、おまけに三分の二は森林である。必然的に人の住みやすい残りの部分に人口は集まり、犯罪などの諸問題もまたそこに集中す

る。俺はそのような問題を列島のかかえる「病  
気」とし、それを引き起こす一部の人間を「病  
原体」と称して排除の対象とした。殊に夜の  
街にはその種の悪党がよく見られた。日本を  
オペするなんて謳いながら、この国にメスを  
入れるつもりで、夜な夜な目を光らせて街を  
闊歩する日々を送っていた。しかし、夜の繁  
華街を歩く白衣姿はどう見てもそれ自体が異  
物であり、優秀な好中球もとい警察官によつ  
て、毎度のように職質にあった。その度に俺  
はエピソード化された己の哀れを語り聞かせ  
た。振り返ってみると、俺が医者を目指したの  
は小学生の頃だった。母の病が俺の進路を決  
定づけた。母はステージ四の胃がんにおかさ  
れ、三年の闘病の末亡くなった。日に日に弱  
っていく母の傍らで、俺は猛烈に勉強した。  
医者になるまでの果てしないプロセスなど知  
らずに、ただ勉強すれば医者になれると信じ、  
ひたすらにペンを動かした。そのまま中高一  
貫の進学校に合格し一年の時から医学部受験

まっしぐらだった。その時には母は天国に旅立っていたが、それでも俺は医者になる夢を諦めなかった。

それでも、天才や偉人と呼ばれる者は、総じて何かに一途であることを知った。周りの選ばれし何人がそうだった。俺は脳みそに皺を刻み込むにつれ、たとえ医者になれたとしても治したい人はもういないという現実に気づいてしまった。これまで気づかなかった、しかし確実に自分のそばに横たわっていた事実を知った俺は、それだけでこの世のすべてを諦観し悟った気になった。医者になるという目標は手段であり道具であり、母の病を治すという叶えようのない夢こそが本当の目的であることを思い出すと、その後は同じ場所で足踏みするような進歩のない日々を過ごした。夢ばかり見る癖だけが残って大人になった俺は、夜、眠れないから街へ出た。寝て見る夢の中で母はたびたび俺の前に現れたが、そのためにかえって孤独を感じ、父を失った

後は自分から家族を奪った死という存在に怯えていた。不安を打ち消すために俺は通販で買った白衣を身にまとい、いかにも悪さをしそうな連中を敵視し、手当たり次第に絡んでは身にならない口論をした。無論日本をオペするなんてスローガンは傲慢甚だしく、実際はただの憂さ晴らしに過ぎない。向こうも大抵は好奇の目を向けるか軽く受け流してくれただが、時折親の仇のごとく、容赦ない反撃にあうこともあった。てめーふざけたマネしやがって」この日もタバコのポイ捨てを指摘した三人組に、路地で殴る蹴るの暴行を受けた。相手の悪事を咎めるまではよかったが、その後には不要な罵詈雑言を投げつけたのがまずかった。側から見れば俺の方が無闇に因縁をつけた悪者であり、通りすぎる誰もが捨てられたタバコと一緒に俺の受ける暴行も見て見ぬ振りした。本来罪のないはずの傍観者たちをも共犯にしてしまう、この憎き病原体を排除しなければ。いくら正義感に燃えようとも、

現実的な数の暴力には敵わない。左頬にパンチをもらうと、俺はしばらく天を仰いだ。建物や屋根の隙間からひよこの飛ぶ星空が覗いた。三人は満足したようで、笑いながら遠ざかっていった。

熱をもった頬が疼く。目に入るものすべてが煩わしい。この海では他人が溺れていても無関心を装い、そのくせ自分が溺れていることには気づかない。その点俺は自分が溺れていることを知っていて、他の人とは違うんだぞと、言葉にならない叫び声をあげる。己を憂いたところで現状は変わらない。だからこうして夜という手軽な非日常で気を紛らわす。

見たくないものを曝け出し見るべきものを覆い隠す孤独な海で、若さだけが取り柄な感性を靴のかかたと一緒にすり減らす。結局この日は喉につかえるような熱りが冷めるまで、ひとりぼっちのアパートには帰らなかつた。

翌日、といっても朝方まで歩き続けたその日の午後、両親の墓参りにやってきた。そ

の日はお盆休みの真っ最中で、同時に父の一周忌だった。その偶然の重なりに、クリスマスと誕生日を一緒に祝われていた幼少期の自分を思い出す。十二月二十五日生まれの俺は、ケーキを一個分食べ損ねている気がしてよくごねていた。親族の都合で先週行われた法要では、別に親しくもない叔父にそのことを回顧され笑われたりした。叔父にはむかついたが、生前の両親を偲ぶ集まりで自分の話題が出ることに喜びを感じた。その時のたしかに幸福と、両親が買ってくれたホールのデコレーションケーキを思い出しながら、色とりどりの花束を、両手に抱えて階段を登る。も両親の墓は竹藪に囲まれた高台にある。もともとが丘陵地帯なうえさらに高いところにあるそこから、富山市の街並みとその奥に広がる海を一望できた。日常は下界に見下ろせても、八月の猛暑からは逃れられない。掃除を終える頃には、俺の体もまた吹き出した汗が、墓石と同じに陽光でひかっていた。再

び疼き始めた腫れた頬をさすりながら、こんな顔は見せるべきでなかったと後悔する。あの三人組もお盆の時期に大切な故人を思い出してやるせなかったのかも知れない。感傷的な気持ちに萎れていると、お盆には海にはいっちゃだめよ、と母の声が蘇る。

墓参りの後は、父が交通事故に遭った現場に向かった。何の変哲もない十字路にはたくさんのお供物が置いてある。生前父が好んだ和菓子や紅茶が、もとは普通の道だったこの場所と一緒に奇妙な神聖さを帯びている。日没には程遠い午後三時頃、休日の散歩と称して歩いていた父は、十九歳の青年が運転する軽自動車に轢かれて亡くなった。時速四十キロの車体に飛ばされた故、受け身も取れずにコンクリートで頭を強く打つての即死だった。それまでの当たり前が一瞬でひっくり返った。あの日、俺はひとり参考書に向かっていた。冷たい奴だと言われるかもしれないが、俺は父を殺した青年に怒りを覚えていない。初め

て彼と面会した日、彼は走り慣れた道で油断  
していたこと、普段は十字路の前で停車を徹  
底していたこと、この日は「たまたま」よそ  
見運転していたことを、泣きながら正直に話  
した。彼の話は警察が聴取したものと違いな  
く、また事故直後に諸々の対応をしたのも彼  
だった。平気でひき逃げする人もいる中、彼  
は気を動転させつつなんとか父の命を救おう  
と懸命にもがいた。それもあつて俺は彼を非  
難するどころか、誰よりも責任感がある、信  
用に値する人だと思つた。思えただけで、真  
実は違うのかも知れない。警察から聞いた話  
も全くの嘘かも知れない。他人の腹の中は本  
人にしかわからないし、本人ですらたまに見  
失う。それでも俺の本能にも似た本心は、青  
年はある意味で「潔白」だと決めつけて、そ  
れから一度も憎んでいない。かといって、彼  
のことを許せているのかと問われれば、それ  
もまたわからない。

あの日以降俺の心には冷たい熱が巣食つて

いた。ただ、俺が憎むとしたら、一定数は必ず不良が出てしまう、この世界のシステムである。交通事故による死者数はこの数年減少しているとはいえ、毎年必ず二千人以上が命を落としている。それはこの世から自動車の運転が禁止されない限り、決してゼロにはならない悪魔の数字。そしてその数より少ないとはいえ（また、一部は自業自得だとしても）人生を狂わせた加害者が存在する。父も青年もこのような運命の渦潮に飲み込まれたに過ぎない、悪いのはこの世界だなんて自分を慰める。そして、夜の街の不良も規模は違えど、この世界の渦潮に飲まれた犠牲者なのではないか。交通事故が毎年一定数の死者を出すように、彼らもまたほんの些細なきっかけで誕生し、本人たちもとぐろ巻きな渦に抗おうと、もがき苦しんでいるのではないか。もっとも、あのチンピラに暴行をさせる原因となった俺もまた、自身を不良と認めなければならぬ。それどころか、数の暴力で殴られた俺の方が

加害者だったと今なら思える。俺がいなければ彼らに拳を握らせることも、他の通行人に気まずい思いをさせることもなかったのだから。喉につかえる妙な熱りはそのような加害者意識によるものだ、この時初めて自覚した。そして俺があ青年のことを完全には許せないでいるのは、きっと父と青年を同格にしたくないからだ。青年を許すことによって被害者と加害者という立場をないものにしたくなかった。もちろん、父が交通事故によって死んだという事実は未来永劫消えることはない。そのために俺の足には、残りの人生を被害者遺族として生きていくという枷があった。その足枷は同時に自己の罪を意識させた。当時二十歳にも満たない青年に死ぬまで罪を背負わすことの加害性は耐えがたいものだった。俺のうちではそのような加害者と被害者の葛藤が闘っていた。夜の街を無数に抱える列島の、ちっぽけな田舎町で、医者の不養生どころか俺自体が病原体になって周りに迷惑

をかけている。それはやるせなさの裏返しで、俺はひとりぼっちで寂しかった。寂しい夜のふとした瞬間、最後は自分がいなくなること。この世界のシステムに抗いたい衝動に駆られた。青年を憎みはしないが、謝る対象を持つ彼を羨ましいとは思った。謝る対象を持たない俺は言葉では吐き出せない罪の意識に囚われ、かといって正直な自分は間違っても自殺なんてしたくない。上辺だけのしかし切実な自殺衝動を、夜の街を歩くことで相殺しているのかも知れない。世界なんて広言を吐く俺は結局自分のことすら知らず、そうやって幾多もの「かも知れない」に突き動かされて、昼も夜も独学の解剖を続ける。寝ても冷めない熱りはそれだけが俺の存在意義だと言わんばかりに、体の中の名前もわからない部分で、いつまでも居座り続けている。

翌日から本格的に熱があがり、しばらく体調不良は続いた。墓掃除の汗が冷えたのが原因か、その晩は街へは行かなかったものの、

高熱と頭痛にダウンした。「大病はいいがちょっととした風邪はいやだ」と、たしか夏目漱石の小説にあった気がする。この時の俺の心境はまさにその通りで、頬の腫れはいまだに鈍い熱を帯びているのが別な生き物につかれていようでもどかしい。大病なんてしたことない分、ちよつとした不具合として出す時の熱に心まで折られてしまう。大人しく布団に横たわり、ぼんやりとした視界を天井で埋める。その模様には貝殻や魚の形を見出している。慣れることのない孤独が波のように押し寄せてくる。

この日はシフトが入っていたが、朝店長に電話して休みにしてもらっていた。すると午後、バイト先の後輩から電話がかかってきた。俺は頭の重さを一瞬忘れて起き上がると、わざと数秒待ってから、通話ボタンを押した。「熱出たって聞きましたけど、大丈夫ですかあ」気の抜けるような間延びした低い声に、神木昌也のぽつちやりしたシルエットを想像

する。大学二年生になる彼とは知り合ってまだ半年だが、小学から一緒だった感がある。「ああ、シフトに穴あけてすまん」「先輩が謝るなんて、相当参ってますね」歳の差による言葉遣いの違いはあるが、幼馴染ほどの親しい仲のせいで対等に冗談を言い合える。だからなのか、「ユメさんも先輩のこと心配してますよ」、俺は彼のそのような報告に、素直に喜べないでいた。

井上夢乃、あだ名はユメさん。看護学校に通う大学生であり、頼り甲斐のあるバイトリ―ダーであり、はたまた勉強ばかりしてきた俺の、遅めの初恋の相手でもある。俺と同一年の彼女は来年度の国家試験の合格を目指して、つまりは看護師になるために、バイトの傍ら勉強に励んでいる。医者になり損ねた俺の過去も知っているはずだが、それをきっかけに話をしたことはない。「ユメさんのことで俺に嘘ついたの謝れ」「いや、嘘じゃあないですよ。本当です」「証拠はあるのか。なかった

ら、昌也には虚言癖があると店の放送で言い  
ふらしてやるぞ」先輩が変人な証拠ならいく  
らでもありますけどね。まあ、なんかいつも  
通りでよかったです」大事にしてください、  
ともの一分足らずで電話は切れた。静かに  
なったスマホを覗き込み、残念そうにしてい  
る自分の顔を見て先ほどの発言を後悔した。  
人を疑う癖は日常的なものになりつつあった。  
俺は言葉が嫌いだと愚痴を吐いた。例の青年  
の言葉を信じたのは、心がこもっていたから  
だった。行動や表情、汗や涙といった何かを  
付随しなければ、言葉はただの文字の連なり  
である。そして、人の命ほどの重みがなけれ  
ばもはや言葉を信用できない自分は、あまり  
にも冷徹すぎやしないかと蔑んだ。父を殺し  
た青年は信頼するのに、気を許せる親友には  
疑いの目を向けてしまう自分が、言葉と同様  
に嫌いだった。それでもユメさんに好かれて  
いる可能性を信じたいと思う自分は少しだけ  
素直で悪くない。それでいて恋に恋する自分

に酔っていると思うと全身を虫が這うように  
むずむずする。何かを患っている時の弱り果  
てた自分は特別惨めに思えて面白くなく、た  
だの熱も恋の病も、病氣と名のつくすべてが  
憎い。

熱に浮かされたこのふわふわとした感覚は、  
俺だけのものではない気がした。列島は大丈  
夫なんだろうか、なんて大それた心配に思わ  
ず笑ってしまった。体は熱を帯び、それなのに  
内側は冷え切っていて、温度差で割れるガラ  
スのような危うさは、夜の街に繰り出してか  
ら日に日に募っていく危機感であった。この  
世界を、この国を、いつしか信じられなくな  
っている。一定数不良が生まれるこの世の仕  
組みもまた漠然とした不信に一役買っていた。  
あの青年みたいな救われるべき善人もいるの  
に、それでも救いようもない不良ばかりが目  
につくのはなぜだろう。真面目な人間ほど馬  
鹿を見るように思えるのは、きっと大外の形  
が間違っているからだ。つまりは骨格から間

違っているのではないか。いつか図鑑で読んだ、哺乳類の胸椎と頸椎は骨の数が同じであることを思い出す。では何が人とそれ以外の動物を分けているかといえば、骨の大きさや長さといった骨格である。棺の中に収まる母の骨は驚くほど綺麗に焼け残った。でもそれは、病室ですで見えたものだった。治療の過程で母は痩せ細っていき、その姿は余分なもの削ぎ落とした、人として洗練されたものにした。人格は骨とは別に人間を人間たらしめる骨格であり、母の人格は半世紀にも満たず常人のそれを超越した。彼女は長い辛い闘病生活でその苦しさをおくびにも出さなかった。だからこそ、ある時ふと漏らした本音が、俺の耳には真に迫って聞こえた。「もっといろんなところに行きたかったな」

その後彼女は自分の失態に気づき、すぐに笑顔で覆い隠した。俺はその笑顔に母の無意識な残酷さを感じた。いつそ子どもみたいに涙を流して、悔しいと抱きしめてくれた方が

まだよかった。母は俺の前では必死に無理を  
していて、その分ひとりになった時に泣いて  
いるのではないかと想像させる、そんな母の  
残酷さは、俺の青年に対する残酷さでもあっ  
た。俺もまた彼に対して同じ想像をさせてい  
るような気がした。どうして父を殺したんだ、  
なぜよそ見をしたんだと、泣き喚いた方がよ  
かったのではないか。けれど父が即死だった  
ことを聞かされた時、不思議と悲しくはなか  
ったのだ。それは母の病死に比べてあまりに  
も呆気なく迎えた父の最期を、幸福な死に方  
のように思っていて、父の死を悲しめない冷  
徹な自分を認めたくないために、言葉によっ  
て無理やりに理由を探しているのではないか。  
今更考えて何になる。俺がいくら逡巡したと  
ころでどうしようもない。そう放り投げたく  
ても、次の瞬間にはまた考えている。一度燃  
え出した火種はなかなか消えず、いつまでも  
胸のうちで燻り続けている。それでも自棄に  
なってバケツをひっくり返し、乱暴に思考を

放棄することもあった。考えることをやめた俺は、羽ばたくのをやめた鳥のように落ちていく。そのたびに俺は広くて深い海に救われる。悩んでいるのはお前だけじゃないと、夜の街には無言の叫びが、靈魂のように揺蕩っている。

バイトもまた人とかかわりによって孤独を紛らわす手段だった。それでいて、俺の他人に対する不信感は、たとえ制服を着たところで変わらない。作用反作用の関係のようこの世界に対する反発は休むことを知らず、レジに並ぶ客に目を光らせて夜の街歩きが続きをする。それでも俺は、ユメさんと会えるバイトの日を楽しみにしていた。趣味もない単調な生活における唯一の楽しみと言えるかも知れない。

完全に熱が下がり翌日に出勤を控える夜、俺はなかなか寝付けない微睡みの中、何度目かわからない母の夢を見た。小学校低学年の時の俺が、熱を出した日の夢である。子ども

の頃の熱を出した朝は、何もかもが特別に見えていた。雪が降った時と同様、大人にはうんざりな風邪を引くという行為が、いつもと同じ景色を別のものに変えてしまう。カーテンを透けて差す光も、軽快な小鳥の囀りも、どこか優しい特別な朝。アパートの寝室とリビングは続いていて、引き戸を開けると枕元からテレビを見ることができた。遅めの朝のニュース番組ではサラリーマンや通勤電車の映像が流れている。日本列島は完全にお目覚めだね、とお粥を持った母が陽気に笑わせてくれる。それだけで体のだるさがとれて軽く感じ、陰鬱とした気持ちまで楽になった。胸のうちに生まれたまん丸な気持ち、ウイラスのトゲを削り取って、体じゅうに仲間を増やしていく感じがする。至福な夢はそこで終わった。いつのまにか現実の朝が訪れ、自分は二十一歳になっている。窓の外はまだ薄暗く、壁にかかる白衣に紫色の影が落ちている。熱は下がったが頬の腫れは完全にはひいてお

らず、ずいぶん休んだように思えたが、実際は欠勤を二回しただけだった。実はあの夜から一週間も経っていないことに気づくと、時間の流れの不思議を思った。時計の針が倍の速さで動くのは朝の特権だ、なんて過去の失敗を反芻しながら、遅刻しないためにも布団を出る。寂しいのでテレビをつけて、朝食のトーストを食べる。テレビの中に活発な朝はなく、出演者の誰も笑ってはいない。実際、女性の若いアナウンサーは男のベテランアナの話に笑ってはいるが、心からは笑えていないように見える。やがてスタジオでの明るいやりとりが終わると、その後は暗いニュースが続いた。俺がいつ病室を訪ねても、母は笑顔で迎えてくれたが、その笑顔のどれだけが心から笑えたものだっただろうか。母にしか知り得ないことについて考える時、俺の中の時間は幼少期のまま止まっていた。トーストを食べ終え歯磨きを終えても、暗いニュースは終わらないようだった。朝から届けられる

誰かの訃報に嫌気がして電源を消す。間違っても笑顔とは程遠い不機嫌な自分の顔が映る。

病み上がりで立つコンビニの店内は、暗がり慣れた目に明るい。それでいて白く磨かれた床や照明、よく効いた冷房が、普段よりも冷たい印象に感じる。反面、散らかり放題のバックヤードは居心地がよかった。着替えを終えると壁に貼られたシフト表を見、ユメさんと被っていることを確認した。ついでに昌也とも一緒だった。彼はきつくなった制服のボタンを締め直しながら言った。「風邪で休んだ後の学校って、行きづらかったのを思い出すなあ」しかし俺はそうは思わなかった。クラスにマドンナがいるから、なんて口が裂けても言うわけない。先に制服（とはいってもコンビニの）を着て待機していたユメさんとの会話は無い。それでも、義務的なおはようございますが、今朝見たどのアナウンサーのそれよりも、俺に朝を実感させた。

昼時のピークを乗り越えようと、しばらく列のできない時間が続いた。久しぶりとはいえ一年近く勤めていると、休みによるブランクはほとんどなかった。それでも、一向に慣れないものもあった。ユメさんがそばにいないで幸せな気持ち募る。出会った時から想い続けているのに、いまだにこの気持ちを解剖できていない。彼女が与える甘い幸福は、しかし毒をも含んでいた。そして、ニュースとは無縁の目の前のような日常が、時に甘味よりも苦味を思い出させた。父が交通事故にあった翌日、その事故は朝のニュースで大々的に報道された。その日から周りの俺に対する目は変わり、また連日マスコミの質問攻めにあうと、被害者の遺族であるという意識が時間の流れよりも急速に膨らんでいった。それでも青年のことを責める気になれなかったのは、彼もまた同様の立ち場にあっただからだ。父も含め俺たちは平凡な日常を突如として失い、これまでに考えたこともない苦境に立た

される、不運な同志のように思えた。ただ、それ以降何の変哲もない平和的な日常が、かえって息苦しく感じられることがあった。潜在的な死への恐怖が、これ以上大切な存在を失うことを拒否している。それならばいつそ持たなければいいが、他人を跳ね除けて訪れる孤独もまた、畢竟耐えがたいものである。俺の心はそのような葛藤ですり減っていき、被害者遺族の背負う後遺症は一年なんて歳月では癒されない。日に日に複雑さを増す憂鬱な心は、歯切れの悪い、雨を落とさない曇り空のようだった。

「それでは、お先に休憩入りまあす」午後二時になると、昌也は制服のボタンを弾きながら休憩室へ下がっていった。店内に二人は店員がいなければならず、そのため一人ずつ順番に休憩をとることになっている。次に俺が休憩するまでの一時間、ユメさんと二人きりの時間が約束された。経験上夕方まで客はぼつりとしか来ないはずで、俺は必死に話題を

探した。何も思い浮かばない時は天気の話  
題が無難だろうが、あいにく富山の天気は曇  
り空が多く、この時も窓から見える空の雲行  
きは怪しい。普段彼女とは事務的な会話しか  
しておらず、大抵は昌也がどちらかに話を振  
るのが常だった。しかし彼がいなくとも、そ  
の後すぐに俺たちは話し始めることになる。  
ユメさんにとってどうしても無視できない話  
題が、俺の顔に張り付いていたのである。「そ  
の頬、誰かに殴られたの？」看護師と患者の  
接点が怪我や病気であるように、俺は不本意  
に負った傷のおかげで、ユメさんに話しかけ  
られた。昌也が気づかなかったほとんど治っ  
ているような傷に、彼女は気づいてくれてい  
た。

病気をすると世界が自分に優しくなる。夏  
目漱石はこんなことも言っていたっけ。照れ  
隠しにあさったの方を向くと、募金箱の中の  
千円札の折れ曲がった文豪と目が合った。「い  
や、ベタに階段で転んだよ」「その言い訳は、

嘘つく時のベタですよ」それをきっかけに、俺たちの他愛もない会話は続いた。俺がレジに立ち、彼女がおにぎりを並べていく。やがてある程度話題が尽きると、ふと思い出したように、俺は無意識に口走っていた。「ユメさんの夢は、看護師になることだよね。人が死ぬって怖くない？」

看護師の仕事は何だと思ってるんですかとため息を吐くように彼女は言った。それでもちゃんと答えてくれるため、ちぐはぐながらも会話が続けていく。「怖いってことはないかな」「どうして」「俺の声は情けないほど尻すぼみに小さく、自分が死に怯えていることを言葉ではなく態度で伝えていた。そのことに俺は恥を覚えた。ユメさんは作業の手を止めて、確かめるようにゆっくりと言った。「死ぬことは、ひとりひとりが一つだけ持つ、命と同じくらい大切なものだと思う。うまく言えないけど、死ぬことが怖い人ほど、生きることに真摯な人なんじゃないかな」自分か

ら訊いといて何も言わないのは失礼だ。頭ではそうわかっていても、返す言葉が思い浮かばない。「どうしてこんなこと聞くんですか」と、彼女の助け舟にほっとした。しかし、視線が再びユメさんとぶつかった時、瞬間胸を突くような苦しさが襲った。「その傷、誰かと喧嘩したの？ プライベートでは変なことばかりしてるって聞くし、これでも結構心配してるんですよ」

俺の抱く恐怖は「死」という概念に対するもので、それは身近な人を亡くすという経験によって、死に伴う喪失感や孤独感に苛まれた結果である。自殺の拒否はあくまで本能的なものであり、俺の理性は自分が死ぬことは恐怖の矛先を向けていないはずだった。しかし、意中の相手の自分に対する気持ちを知った今、初めて死ぬことを本当の意味で恐れるようになった。「心配かけてごめん。でもすごいね、ユメさんは。俺と同じ年なのにちゃんといろいろ考えてる」「君だって、医大を目

指してたんでしょう？」思いがけない問いかけに、俺は思わず笑ってしまふ。「結局医大生にはなれなかったけどね」「それでも、すごいと思う。私は挑戦もしなかったから」「ユメさんも、医者になりたかったの？」俺の驚きに満ちた質問に、彼女は微妙な笑みを浮かべた。「実は、自分でもわからない。でも、人の命に関わる仕事をしたいとは、小さい頃から思ってた」もう五分以上も客が来ていないという思いがけない幸運に感謝した。店にとっては損失となるこの偶然のおかげで、ユメさんとこんなにも話ができている。「私は、人は死ぬために生きるんじゃない、生きているから死ぬんだと思う。そして医者や看護師は、死ぬことではなく生きることの手助けをする人だって信じてる。結局私は看護師の道を選んだけど、医者も看護師もきつと、目指すころは一緒だよ」真面目で頼りがいがあったまっすぐな彼女の、健気な夢が心に沁みた。彼女が自分を気にかけてくれたのは、やはり傷

のおかげだと思った。そのことに対して、先ほどとは違う恥が芽生えた。やがて店が混みだしたため、それ以降は話をする機会はなく、病み上がり最初のバイトを終えた。

その日の夜、天井の海を見ながら考えた。俺は医者という職業について、かつて調べた知識を思い出した。昔の医者の仕事は病気を治すことだけではなかった。それは「医」という漢字にも表れていて、箱の中に入った矢は呪具であり、医療にはおまじないの側面があったことを示唆している。今ほど医学の発達していない昔は、ほとんどの病気は治らなかった。しかし、たとえ治らなくても、病気の苦痛や死の不安を和らげることもまた、医者重要な役割だった。それは時代に関係なく、また医者に限らず、誰にとっても大切な心がけであると思った。人の苦痛や不安に寄り添うことは、すなわち生と向かい合うことであり、命ある者が生きていく上で必要不可欠なことではないか。そう考えると、これま

で夜の街でしてきた自分の行いが、何よりも  
恥ずべきものに映った。自分の理想にそぐわ  
ない人をこの国にとっての病原体と決めつけ、  
何の生産性もない口論を吹っかけ、時には暴  
力に訴えた反撃を喰らう。俺は他人だけでな  
く、自分にもちゃんと寄り添えていなかった。  
自分もまた一人の他人であり、自分を大切に  
することは、自分を想ってくれる他人もまた  
一緒に大切にすることなのに。

自分を含め、人はいつか死ぬ。死ぬという  
ことは生きていくということであり、生きて  
いるからこそその先に死がある。生と死につ  
いて考えていると、人体としての日本列島か  
ら光が消えるという妄想が働いた。列島とい  
う体から一斉に光が消え寿命を迎えるという  
大袈裟な死の妄想。その輝きは永遠ではなく、  
いつかは消えてしまうからこそ美しい。しか  
し、消えてしまったてなおその光は生きている  
者の記憶に残る。だからこそ、両親と自分を  
繋ぎ止める記憶を思い出すが、決して触

れられない空の月に向かって手を伸ばしているように息苦しい。

そのまま沈むように眠りに落ちると、再び母の夢を見た。夜に見る夢は頭では忘れてしまっても心が覚えている無意識の表れであり、干潮時にだけ現れる干潟のように、普段は隠れている記憶である。「病気と仲良くできたらいいのにね」がんへの抵抗と破壊が絶えず繰り返されている病体の母は、しかし健康な見舞い人の誰よりも、笑うことを忘れなかった。自分が笑うだけでなく周りの人を笑わせようとして、時には自虐ネタも交えて冗談を言った。「笑いは無料で手に入る万能薬よ。私のがんはその副作用かしら」当時の俺には母の態度が、病気を治すことを諦めたように映った。

母は笑う以外に手段を持たない悲痛な運命を背負っている。俺はそれに抗いたくて、むきになって勉強に励んだ。でも、たとえ日に日に痩せていっても、母は誰よりも強かった。理不尽な苦境も困難も、それを笑いに変えら

れる強さ。俺は勉強によって必死に獲得しようとしたが、母はそうせずともすでに持っていた。決して最初から持っていたわけではない。母の強さは、どんな荒波も笑って乗り越えてきた、彼女の人生そのものだった。そんな母の見た笑顔は、心からのものだったと信じた。俺が病室で過ごした時間の半分は参考書に向かっていて、母の目に映るのは横顔ばかりだったかも知れない。それでも、毎日面会時間のぎりぎりまでそばにいたことは事実で、そのために母は笑えていたのだと、少しずつ自分を信じていけたらしい。寝ているか起きているのかわからない微睡みの時間は温かく、体を包み込むのは現実の光だった。過去に囚われ前に進めないでいた俺は、実はもう、とっくに夢から覚めていた。

その日から俺は少しずつ、できることから変わろうと思った。医者になるなんて大きな目標がなくても、俺は母を喜ばせられるはず

だった。また、これ以上ユメさんに心配をかけたくなかった。真面目に生きても馬鹿を見るかも知れない、でも、真面目に生きないことで人を悲しませるのは、もっと馬鹿なことではないか。そのような意識改革に伴う変化は、コンビニという場所にも現れた。慣れ親しんだはずのバイト先がまるで特別なものに見え始めた。一日に数え切れない人数が出たり入ったりするが、その人それぞれに目的が違う。物を買う人、公共料金の支払いをする人、立ち読みで時間を潰す人などが流れ着いてくる。コンビニを小さな島とすると、夜の街では孤島だった人が、今度は漂流物になる。

想像力に委ねて見方を変えると、この世はたくさんの島で溢れていた。大陸もまたとてつもなく大きな島だし、地球だって宇宙という海にぽっかりと浮かんでいる島である。島があるということは同時に、内と外という概念が存在する。島は海があるからこそ島であり、その海は限りなく広がって大きい。雲や樹々

や炎だって、大きなスケールで見れば海になる。たとえ環境は変わらなくても、見方が変われば世界は変わる。世界とはつまりは自分であり、変わったのは他でもない俺自身だった。仕事に真面目に取り組むようになってから、時間の流れがあっという間になった。日々の充実は自信になり、ユメさんと同じ時間を過ごせるという特典はあっても、働くことそれ自体が楽しく思えた。

平和な日常は安心に溢れ、それを失う不安もはらんでいることを、人はすっかり忘れてしまう。

ある日の朝のことである。通勤ラッシュを乗り越えひと息ついていると、不穏な空気を纏う二人組が来店した。俗にいうチンピラ風情の彼らは、こともあろうかユメさんに絡み始めた。「お嬢ちゃん可愛いね、一番のタバコとスマイルひとつ頂戴」それだけならまだしも、会計を終えた後もレジに立つユメさんに

執拗に連絡先を求めていた。彼女はいつもの接客態度を崩さず断っていたが、内心で怯えていたのが見て取れた。以前の自分なら目の前の光景に我慢ならず、病原体どもが、と聞こえるように吐き捨て、あまつさえ殴りかかっていただろう。しかし、俺はそうしなかった。拳は固く握られていたが、暴力を振るうためではない。それを我慢するために震えるものを胸に当て、心の中で自分を説得する。他人に平気で迷惑をかける不良だとしても、彼らは病原体じゃない。言葉よりも先に心臓を持って産まれてきた人間。これまで見聞きした言葉によって考え、自分も周りも傷つけないながら、必死に苦悩する人間である。俺は医者になることは諦めたけど、母のように与えられる人でありたい。後悔ばかりで後ろ向きな俺でも、これからは前を向いて笑えるのだと信じたい。「どうされましたか」意を決して声をかけると、大きい方の男がじろりと振り向いた。俺の声は意図せずに震えていて、そ

れは自暴自棄に歩いた夜の街では、決してあり得ないことだった。「兄ちゃんに用はないよ」「もしお会計が済まれましたら、他のお客様にレジをお譲りください」「俺が迷惑かけたか？ 誰も並んでねえじゃねえか」

サングラスに坊主頭、おまけに百八十センチを超えている大男が、レジ前に用もなく立っているのは明らかに迷惑である。彼の斜め後ろには子分格の男が、兄貴よりも鋭い目つきでこちらを凝視している。「お前、この娘が好きなのか」茶髪にピアスの子分男が、にやけながら言う。レジでは真っ赤な頬のユメさんが、固く両手を握って俯いている。自分の顔は何色になっているだろうと想像する。ユメさんと同じ真っ赤かも知れないし、青ざめているかも知れない。「他のお客様もおられますので」「そのお客様ってのに、俺らも入っているんじゃないかねえのか？」今度の返事は兄貴の方だ。どすの効いた大声を聞いて、店内にいた客がひとり出ていった。雑誌を並べていた

はずの昌也の姿も、いつのまにかどこにも見当たらない。「勘弁してください、もうこれ以上、警察の世話になるのは嫌なんです」そう言って俺は深々と頭を下げた。店長は休みでこの場にいないという偶然が、最年長者の俺に責任を与えた。同時に、今なら何をやっても店長に叱られないという発見が、臆病な俺を大胆にさせた。

「お前、前科者か？」俺の意味深な返答を聞いて、大男の表情は明らかに変わった。その口元は綻んでいるが、どこか引き攣っている印象も受けた。湧きあがる好奇心の裏に隠された、得体の知れないものに恐怖する不安そうな顔。俺のうちで大それた欲望が牙を剥く。彼のうちに生まれた不安を、早く癒してあげたい。「前科はないけど、職質を千回受けた者です」俺の意を決したウケ狙いの発言は、瞬間爆発的な笑いを生んだ。もっとも、笑ったのは大男ひとりだった。和んだかに見えた空気は、それを恥じる彼によってすぐに険悪さ

を取り戻した。兄貴の機嫌の変化を察し、自分の男が取り持つように言った。「思い出ししました兄貴。こいつ、一時期噂になってたあの白衣の奴ですよ」しかし、それが兄貴のブライドをいっそう逆撫でした。こんな奴に恥をかかされたのかと、彼の怒りは頂点に達した。憎しみはそのまま拳にこめられ、俺の治りかけの左頬は、豪快なパンチに仕留められた。歯を折ることはなかったものの、唇が切れて鮮血が床に落ちた。ユメさんの短い叫び声が耳に飛び込み、頬と胸に激痛が走る。その痛みは同時に目の前の男の痛みであり、昔の自分のそれでもあった。俺は過去の自分に懲らしめられたような、奇妙な因果を感じていた。医者なら自分で治すだろ、と男は拳を撫でながら吐き捨てた。その後ろでは子分格の男が引き攣った笑顔でたじろいでいる。彼は額に冷や汗をかいているように見え、やり過ぎだと焦っているのかも知れない。彼の本心は子分であることをやめたがっているのではない

か。しかし、二十センチ以上ある体格差では、逆らっても勝てないのは目に見えている。兄貴はそんな仲間の葛藤も知らず、満足げな笑みを俺に投げた。それでも俺は笑顔の接客を忘れない。胸に湧き上がるこれまでにない感情は、憎しみの炎には燃えていない。自分は殴られても笑えるのだという驚きに酔いしれ、言葉によって人を笑わせたことの、血の湧き立つ快感に痺れていた。臆病な自分が少しだけ勇敢になり、世界がまたひとつ新しい色に染まる。

「これ以上暴れると、いい加減警察呼びますよ！」ユメさんが勇気を出して男たちに言った。彼女もまた決して薄くない殻を破った。けれど、俺はそれに待ったをかけた。警察というワードに反応してか、子分は兄貴を宥めながら去っていった。彼らがいなくなると、途端に緊張が解けて、安堵の笑みが腫れた頬に弾けた。「警察には、通報しなくていい。もう、職質されるのは嫌なんだ」俺が再び懇願

すると、どう見たって俺たちは被害者でしょ、  
そう言ってバックヤードに隠れていた昌也が  
出てきた。「喧嘩両成敗って知ってるか」思い  
がけない俺の言葉に、二人は素っ頓狂な顔を  
した。「片方は試合に勝ち、もう一方は勝負に  
勝つ。お互いが被害者かつ加害者であり、そ  
れでいてどちらも勝者である。この世から『敗  
者』を成敗するのが、喧嘩両成敗の意味なん  
だ」「そんな意味、聞いたことないですよ」ユ  
メさんもまた緊張が解けたように、微笑みな  
がら指摘する。俺はその笑顔に体の傷を忘れ、  
酷い目にあった彼女を想う心がずきずきと痛  
みだす。昌也も一応納得はしてくれたが、あ  
くまで不服を貫いた。俺だって本当は、通報  
した方がいいことはわかってる。自分本位な  
綺麗事のせいで、また同じ被害に遭っても責  
任はとれない。それでも外の曇り空と違って、  
俺の心は晴れやかだった。十年以上かかって、  
ようやく白衣を脱ぐ決意ができた。最後まで  
笑っていた母の世界は明るかった。それがわ

かった今、過去に拘泥こうでいする必要はないと思っ  
た。同時に、父の死に対する押し込められた  
悲哀が無意識に胸のうちから溢れた。父は母  
のように最期は笑っていただろうか。でも、  
笑顔で散歩していても可笑しいか。そのよう  
な父の姿を想像すると、笑いながら涙が溢れ  
た。初めて父の死を思っ泣いた。よほど殴  
られた頬が痛いのかと心配するユメさんは、  
自前の救急箱で手当をすると、震える背中を  
さすってくれた。そんな彼女に今の気持ちを、  
恥ずかしいくらいに正直な俺の気持ちを、い  
つの日か聞いて欲しいと思った。

それから一年後、俺は二泊三日、とある南  
の島に旅行に来ていた。人生初めての飛行機  
のフライトは、海と陸の旅でもあった。煙の  
ような雲をくぐり抜け、移りゆく窓の下の景  
色を見ながらこう思う。世界は可能性に満ち  
ている。自分で世界は変えられる。夢を持つ  
ことを夢見た俺が、新たに歩み始めたのは別

の茨の道。あの日を境に笑う喜びと笑わせる快感が忘れられず、俺はお笑い芸人になることを目指して、東京の養成所に通い始めた。テレビで活躍する芸人のように、飛び抜けた笑いのセンスは俺にはない。でも、俺には俺だけの言葉がある。楽しいと感じる感性があるし、いつの日かブレイクして、列島を発熱させてやるという夢がある。そんな列島人体論を原動力に、俺は地元富山を飛び出した。今は東京でバイトを続けながらステージに立ち、笑いのツボを探る日々を送っている。

環境が変わり出会いと別れを繰り返す中で、人と関わることの楽しさを知った。人は孤島、でも、橋をかけられる孤島である。誰もが孤独かも知れないけど、さまざまな方法で繋がることができる。挨拶は周りを照らす灯台であり、会話は空に架かる虹になる。言葉に付随すべきは笑顔であり、笑いは万能薬とは本当だった。人を笑わせ自分も笑うことが、今の俺を生かしている。

笑いについて突き詰めて考える過程で、わかったことがもうひとつ。爆発的な笑いは、緊張から生まれるということ。

実は、この南国旅行には相手がいた。それはなんとユメさんである。芸人になることを決意したあの日を境に、彼女との距離は急速に縮まった。二人で共通の大男に恐怖したという、吊り橋効果のおかげかも知れない。もつとも俺の恋心は一朝一夕のものではなく、ユメさんもとい夢乃さんにその気持ちを洗いがらい告白した。長々と続く言葉の果てに生まれた、彼女の恥ずかしそうな顔きと燃えるような赤い頬を、俺ははっきりと覚えている。言葉とはつくづく便利なもので、俺の人生初の愛の告白は、たった数行で語られてしまう。しかしたった数行で、俺たちは楽しかった記憶を思い出すことができる。短い言葉のアルバムは、彼女と恋仲になった記念日以降急速に分厚さを増していった。しかし、これまでデートの舞台は主に互いの本拠地である富山

か東京で、今回の旅行は二人にとって初めての、待ちに待った遠出だった。

一日目の日程は移動が中心で、観光は二日目に楽しんだ。その夜、夕食を済ませた後、二人はホテル近くの砂浜に赴いた。夜の海は昼間のエメラルドグリーンにベールを被し、瞬く星空に出番を譲る。その空には今宵、花が咲く。周りには同じ花火を目当てに集まった人たちが、ひと足先に話に花を咲かせている。俺たちもまた花火が打ち上がるまでの時間、他愛もない会話で盛り上がった。夢乃さんは花火を映画のようだと言った。エキストラは花火に関わるすべての人たちで、人の数だけ物語が生まれる。「もし花火にエンドロールがあったら、いったいいつまで続くだろうね」本編より長くなるかも知れないエンドロールを想像する。俺と夢乃さんの名前が続いで表れるのなら、何回だってチケットを買ってしまいそうだと思う。「もしもこの夜空が映画館なら、終演と同時に明るくなるのかな」

「あはは。なんか怖くて幻想的」「人はそれを夜明けという」「じゃあ、この世界はまるごと映画館だ」

午後八時、放送によるカウントダウンとともに、待ちに待った上映が始まった。耳に心地よい破裂音とともに色とりどりの花が咲き乱れる。さっきまで映画館の話をしていさせいか、巨大なポップコーンの弾けるように聞こえる。ほんのり甘い塩味のポップコーン。幾つ食べても物足りないそれのように、いつまでもこの花火を見ていたい。それでも、爽快で甘美な輝きには、いつか必ず終わりが来る。最後の花火が闇夜に溶けた後、二人はかすかに煙がかった無言の空を眺めていた。周りからは感嘆の声とともに次々に人が消えていく。俺は頬に伝うものを悟られないよう、誤魔化しながら空を見上げた。花火で泣く未来があるとは、一年前の俺には想像もできなかった。

「あの火薬玉はいつ燃えるのだろう」そう呟

いた俺の、視線の先にあるのは満月だった。夢乃さんも同じ空を見てくすりとした後、本当の映画館でするように小声で言った。「あれが破裂したら、私たちはきつと死んじゃうね」今度は俺の笑い声が海の音に混ざる。それからしばらく月と空を眺めた。もしいまの例えが本当になったら、いったいどんな花が咲くだろう。その時の音はどんなに大きいだろう。そんな妄想が実現する確率は、おそらく限りなくゼロに等しい。それでも、不可能ではない気がした。今こうして夢乃さんと話していることも、俺にとっては奇跡に近い。この人と一緒にらいつ死んでもいいと思える彼女の隣で、同じ場所で花火を見て月を眺めているという奇跡。映画のようないまを改めて意識すると、それだけで動悸がし緊張感が高まる。お互いが無口のせいか、どこか張り詰めた雰囲気になる。それを打開する術を思いつかない時、芸人として恋人としての、己の至らなさを思い知る。

その時、広い海のどこかで魚が跳ねた。音のする方に目をやると、月の光で銀色の魚体が光る。硬い着水音と同時に海面の細長い月が壊れて、すぐ元通りになると怖いほどの静寂が、波の音すらかき消してしまふ。空には何事もなかったように、まん丸な月が浮かんでいる。俺たちにはそれが可笑しかった。本当に破裂した、それどころか蘇ったと、その後しばらく笑い転げた。「破裂したけど、死ななかつたな」ひとしきり笑った後、俺はさっきまでの緊張を忘れていた。夢乃さんもハンカチで涙を拭いながら、死ななかつたねと頷いた。「そろそろ戻ろうか」「うん」

二人は立ち上がると、どちらからともなく手を繋ぐ。夜の海の真っ暗な砂浜に、二人分の足跡が生まれては消えた。海面に伸びる月の光は、まるで本物の月に向かう道のように、このまま月まで散歩しようか。俺が言うと、彼女は繫いだ手の腕を振った。その腕を俺も振り返し、海と街の境をゆっくり歩いた。「明

日は何しようか」「まだ決めてなかったね」「最終日は悩むなあ」「きつと、どこに行っても楽しいよ」

遠くで魚の音が響く。まだ花火は終わらないようだった。きつと明日も続くのだろう。生きている限り記憶の中で、何度だって上映されるのだろう。彼女の背中についた砂を払ってあげると、何かを思い出したかのように暗闇の中に笑顔が生まれる。それにつられて自分も笑う時、どんな悩みだって跳ね除けてしまおう、まん丸な好きがまたひとつ爆ぜる。

その日の花火は翌日の新聞で取り上げられた。同じ日の同じ時間、東京のビルから身投げした青年の記事は、同じ一面の目立たない片隅である日の事故の加害者であることを告げた。